敬語の誤りについて

辻村敏樹

日本語がむずかしいと言われる理由は色々あると思いますが、中でも敬語表現広く言って言語待遇の複雑さというものはその最も大きな問題の一つになっていると云えましょう。

今日、私たちの言葉の中から完全に敬語をとりされと云われれば、それは実質的に沈黙を守れと言われたのに等しいことになると思います。それほど日本語の中に敬語の占める位置というものは大きいものです。それにも拘らず、いや、それ故かも知れませんが、その適正な使い方はなか〳〵むずかしく、ついうっかりその使い方を誤るという例は決して少くありません。そこで、以下にはそのような問題について二三具体的に考察を加えてみたいと思います。

(1) 雨がお降りになる

これは大分前のことになりますが、私がラジオのある放送を聞いて居りました時(それは一種のクイズのようなものでしたが)アナウンサーがゲストの一人に向って、天気がよいのにどうして長靴などはいて来たのかという意味の質問を発したのに対し、その人が、出がけには雨が降っていたのだということを説明しますと、アナウンサーは「そうで御座いますか。あちらでは雨がお降りなっていた。それで長靴でおいでになったというわけでございますね。」というようなことを言って居りました。文句は右の通りではありませんでしたが、私の耳にとまったのは「雨がお降りになる。」という言い方でした。

これは私には非常に奇異にひびいたのですが、その後気をつけていると同様な言い方はちょいちょい耳に入ってくるようです。

ついこの間も洗濯屋が「黄色いしみがおつきになっていますね。」と言うのを聞いて、やはりおやっと思ったことです。

一体「お……になる」という表現形式は、申すまでもなく、話手が自分よりも身分的に高いと判断するか、或いはそのような扱いをした方がよいと判断した対者または第三者の動作についてこれを述べようとする時に用いるのが本来です。従って、アナウンサーがゲストに向ってこの形式を用いたのに不思議はありませんが、「降る」というのはゲストの動作でも何でもありません。しかも「お降りになる」という形をとることによって敬意に向けられる対象は何かと言いますと、普通には敬語などの用いられない雨なのです。ここにこの表現のおかしく感じられる理由があると思われます。このことは洗濯屋の例についても同様だと思います。

ところが、実際は必ずしもこのような理由からだけでは説明がつかなくなって来ます。何となら、一方に「あなたは随分沢山本がおありになりますね。」とか「あの方もお家がお焼けになったそうです。」とかいうような言い方が屢々耳に入って来て、しかも、それが前の場合と違って別におかしいとは感じられないからです。

ではどうしてこのような表現の場合には、そのまま見すごされてしまうのでしょうか。

そこで、考えてみますのに、この場合、本なり家なりは明らかに「あなた」または「あの方」に属するものと考えられます。従って、本が沢山あるという状態、及び家が焼けたという事態は、それぞれ「あなた」または「あの方」の一つの状態として綜合的に把握され判断されます。しかもそれが言語に表出される場合、その述語部の基幹となる言葉は「ある」及び「焼けた」であるところから、つい「おなりになる」「お焼けになった」という表現がとられるに至ったのではないかと思われます。

右の例の場合はいわゆる総主を持つ文、例えば「象は鼻が長い」に該当するわけで、その「象」にあたる部分が「あなた」であり、「あの方」であると思います。そして「鼻が長い」に対応するのが「本が沢山ある」または「家が焼けた」ということとなろうかと思います。そうすれば、その「ある」や「焼けた」が敬語形式におきかえられるのは不自然ではなくなると思います。特にあるという言葉の場合は「……がある」という形で一つの性質や状態をあらわす言語慣習がありますから、（例えば、「あなたは元気がある。」「あの人は決断力がある。」等）それが「おありになる」という形式をとるのはむしろ自然でもあり、従って「あなたは元気がおありになりますね。」というような言い方は前々から行われて来たのだと思います。こう解釈しますと、「本がおありになる。」も別に不自然ではなくなります。そして、そのような言い方が一方にある以上「お家がおやけになった」もまた肯定されて来るかと思います。

総主を持つ形の場合はこれでよいとして、それでは総主を持たない場合はどうでしょうか。例を前のにとって、言いかえてみますと、「あなたの本は随分沢山おありになりますね」となり、「あの方のお家もお焼けになったそうです。」となりましょう。前の言い方はちょっと作った感じになりますが、あとの方の例は極く自然で、むしろ「あの方もお家が」というよりきやすいようです。（「あの方も」という場合は特に人に力を入れていった場合の言い方になりましょう。）

では、この「あの方のお家もお焼けになったそうです」という言い方はどう解釈したらよいでしょうか。これは勿論総主を持つ文の構造では説明できません。とすると、やはり、「家」は「家」でも「あの方のお家」だから、ただ「焼けた」といったのではぞんざいに聞こえるという気持から所有主である「あの方」に対して用いる形式をその所有物である家にうつしても用いるに至ったのではないかと思います。従って、形からは「家」に対して敬語が用いられているようになっていますが、話し手の気持の根底には「あの方」と表現された人に対する敬意が働いていて、それが「あの人」を「あの方」と言わせ「家」を「お家」と言わせただけではまだ物足らなく、ついに「焼けた」をも「お焼けになった」

という表現に変形させたのだと思います。

これは所有者に対する敬意表現の形式をその所有物に対しても移し用いたというところに問題があるのでしょうけれど、右のような心理的過程を考えてみますとさして不自然ではなく、従って後に述べますように古来その例も決して少くないのですが、現代語においては特にその傾向が顕著になったというのにすぎないと思います。

では、どうして「お家がお焼けになる」のがおかしくなくて、「雨がお降りになる」や「しみがおつきになる」のが変に感じられるのでしょうか。これは、おそらく「家」というものが心理的にいってその所有者に近いと一般に考えられるのに対して、「雨」や「しみ」が特定の人に近いとは考えられないからではないかと思います。

ただ、それでも右のような表現が使われたのは、アナウンサーや、洗濯屋が、「雨」なり「しみ」なりを、その話相手であるゲストや「私」の側のものとして把握したから、そして、現代語の尊敬表現の代表的形式が「お……になる」であるところから、ついこの形式をとるに至ったのだと思われます。

そして、右のような言い方が、洗濯屋はともかく、一応学も教養もあるアナウンサーの口から発せられたという事実に事の是非に拘らず注目したいと思います。

(2) お変りもいらっしゃいませんか

さて、今述べましたと同じような問題に手紙の文面などによく用いられる「お変りもいらっしゃいませんか。」という言い方があります。これは勿論「お変りもおありになりませんか。」とも言いかえられるので、そういう点からみても、前の問題と同様な性質のものであることはわかります。併し、ここでは特に「いらっしゃる」という言葉が用いられることについて問題にしてみたいと思います。

ところで、この言い方が問題になるのは「お変り」が「いらっしゃる」道理などないというところにあると思いますが、すでに金田一先生なども「国語研究」の中で、

> 拝啓炎暑の候、御変りも無くいらせられ候や伺候
> で好い筈であるが、丁寧な語法に奔つて、「御変り」といふやうな無形名詞にまで、『御変りも御座なく候や』などと云ふが普通になつて居り、これが、口語にも、
> 『御変りも御座いませんか』
> 一歩進んで、
> 『御変りもいらつしやいませんか』
> に至つては、確かに間違である。厳密には、
> 『御変りも無くいらつしやいますか』
> のことである。

というように述べて居られますが、その勢力は衰えるどころか、益々益んであり、この頃では女性の挨拶の言葉と云えば、すぐ、あの尻上りの独得な響きのある「お変りいらっしゃいません?」という文句が頭に浮んで来るくらいです。

そして、この女性の表現はやはり手紙の言葉から来ていると思います。ただ、それが、疑問の助詞の「か」をすてて、否定終止の形で用いられるのは、女性の心理に適したものがあるからでは

ないかと思われます。すなわち、書き言葉と違って話し言葉ではイントネーションによって疑問の意をあらわすことができ、露骨に「か」といわなくてもすむからだろうと思います。なお、右のような単なる質問の場合と違って、「行きましょう」と勧誘するところを「いらっしゃいませんか」というのはやはり婉曲な言い方で、これは男にも用いられますが、その場合でも、女は「か」を言わないで「いらっしゃいません?」といってすますのは二重に婉曲になるからだと思われます。

それはさておき、では、どうしてこのような言い方、つまり「お変りいらっしゃいませんか。」が現れるに至ったのでしょうか。

それは恐らく、「ござる」と「いらっしゃる」との語性の相違から来たのではないかと思われます。

すなわち、「ある」――「あります」――「ございます」という系列を考えてみますと、「ございます」は確かに言葉遣いを丁寧にするという点において、最高の敬語表現をなすことができます。併し、それはどこまでも言葉遣いの丁寧さという点に極限され、相手や第三者の動作や状態に即しての敬語表現をすることはできません。ところが、「いらっしゃる」の方はそれができます。そうなれば、人々が前者を去って後者につくのは自然の勢と云えましょう。

こうして、「○○先生でございます。」よりは「○○先生でいらっしゃいます。」の方がとられ、「××さんではございませんか。」よりは、「××さんではいらっしゃいませんか。」が好まれ、ついにそれらに引きこまれて「お変りございまんか。」の場合まで「いらっしゃいませんか」というような言い方がとられるに至ったものと思われます。(なお、「○○先生でおありになります。」という言い方も理屈からは考えられますが、それが実際には余り行われないのは「で」と「ある」とが直結して断定の意味をあらわすのにその間に「お」を挿入して「お……になる」の形式にするとその緊迫性がなくつて、断定の意を示しにくくなるからではないかと思います。)

さて、とにかく、このようにして「お変りいらっしゃいませんか。」という言いかたが現れたとしてやはり、それが問題にされ、論議の対象にされるのは、「いらっしゃる」という言葉は本来、人について用いられるはずなのに「お変り」というのは人の状態でこそあれ、決して人そのものではないというところにあると思います。そして、それ故にこそ「お変りございませんか。」が正しいとされるのだと思います。

ところが、そういうふうに考えてみますと、この「お変りございませんか。」という言い方も問題になって来ます。

何となら「ござる」という言葉はもともといわゆる尊敬語に属するのですから、それが無形名詞の「お変り」などに対して用いられたのは誤りであり、従って、右の言い方は誤りから出発した感心できない言い方だということにもなると思います。

併し、それは歴史的に溯ってみればそうだというだけのことで、私たちはむしろそれよりも今日「ございます」という言葉が専ら「ある」の丁寧形として用いられているという事実の方に目を向ければよいのだと思います。そうすれば「お変りございませんか」という云い方は認めないわけには行かなくなってくるので

はないでしょうか。

ところで、このように考えをすすめて来ますと、私の頭には室町時代から江戸時代にかけて「ござる」と並行して用いられた「おりゃる」及び「おじゃる」という言葉が浮んで来ます。

この言葉の起原はそれ〳〵「おいりある」及び「おいである」だといわれますが、それを裏書きするように、どちらも、本来は尊敬語として用いられて、例えば「仁愛ノ心カヲリヤッテ……（蒙求、六、一七ウ）（湯沢幸吉郎「室町時代の言語研究」一一四ページ）

猫殿の初めておぢやつたぞ、もてなしまらせい（亀井高孝編「天草本平家物語」一八三ページ）

のように用いられています。ところが、それは転じて、

何としたものでをりやらうぞ（狂言記、巻之一、烏帽子折）

我々みな〳〵一所に、御城にゐて。おじやつたが。不思議な事がおぢやつた。（おあむ物語）

というように丁寧語法にも用いられるようになっています。これは「ござる」の場合も同様であることは次のような例を見てもわかります。

物申サウト云フタレバ名人ガ御座タト云（蒙求、四、三五オ）（室町時代の言語研究。一一四ページ）

それがし別の願ひもござない、ただ一つの望みがござる（伊曾保物語。岩波本二六ページ）

そこで、これら三語に共通して云えることは、どれも尊敬語から丁寧語に転じているということです。しかも意味は三者全く相近いものがあります。

このように考えて来ますと「いらっしゃる」もまたこれらの言葉と軌を一にしないとも限らない、少くとも「お変りいらっしゃいませんか。」というような言い方があるにおいては、となってくるのではないでしょうか。

私は昨年の春頃の言語学会で、隣の座に坐ろうとした二十五六才の婦人に「そのお席あいていらっしゃるんですか。」という質問を受けたことがあります。この「いらっしゃる」はどう解釈したらよいのでしょうか。

これについて今泉忠義氏の見解に耳を傾けたく思います。同氏は「現代語法の諸相」（昭和十八年六月、岩波書店刊）の中で、「現代の敬語」と題して執筆して居られますが、その中で、やはり「ございます」と「いらっしゃいます」との交渉について述べられ、その理由の一つとして

旦那さんがお呼びなされてで御座りまする（隅田川続俤 奈河七五三助作天明四（一七八四）年初演）

というような江戸時代の例をあげて、その「てでございます」という言い方が現代ではなくなった為、それに代って「ていらっしゃいます」がのさばり出たのだろうということを考証して居られます。

なるほどこのように考えますと、江戸風には「お席があいてでございます。」そして現代風には「お席があいていらっしゃいます。」となって、先に申しました「そのお席あいていらっしゃるんですか。」も解けて来ます。

ところが、この場合更に退いて考えてみますと、私にはどうも「そのお席お空きでいらっしゃいますか。」という云い方も可能なように思えます。そして、それは勿論「お空きでございます

か」におきかえることのできるものです。とすれば、ここにも「ございます」と「いらっしゃいます」との交流は見られるわけです。

とにかく以上のように考えて来ますと、「いらっしゃいます」が「ございます」にとって変る可能性は非常に強いわけです。

もっとも、今泉氏が同じ論文の中で指摘された「お降りの方はいらっしゃいませんか。」を逆に「お降りの方はございませんか。」という例もありますけれど、これはむしろ、「いらっしゃる」が「ござる」に非常に近くなったためおこった現象と解釈することができます。

以上、「お変りいらっしゃいませんか。」の出どころを考え、自然「いらっしゃる」という語の進行方向に及んだわけですが、それにしても、「いらっしゃる」が現段階において丁寧語にまで移ったと考えることはできません。そうするとこの云い方は「そのお席あいていらっしゃるんですか。」と共に、前にあげました「雨がお降りになる。」や「しみがおつきになる。」と共通するものがあることになります。そのことは、「いらっしゃる」と「お……になる」形式を互におきかえて「お変りおありになりませんか。」「そのお席お空きになっているんですか。」とも云えるし、「雨が降っていらっしゃる。」或は「お降りでいらっしゃる。」「しみがついていらっしゃる。」或は「おつきでいらっしゃる。」とも云えるというように形の上からも云えますが、結局両表現とも、人間でもなんでもないものに対していわゆる尊敬表現の様式をとっているという点が問題になると思います。

ではどうしてそのような表現がなされるのかということについてはすでに述べました。つまり話手が、相手や第三者の動作や状態について述べようとする時、できる限りは丁寧な言い方にしたいという気持から、その所有物や所属物に対しても、つい、その人自身に対するのと同様の表現をとってしまう。それが更に極端になると、直接的にはその人と関係のないものまで、その人の側のものとして把握した表現にするというところにあると思います。

ところが、この最後の段階のものは確かに行過ぎと考えられ、おかしく感じられる場合が多いのですが、中間の段階、つまり、所有物や所属物に対して敬意表現を用いることは必ずしも現代になってはじまった新しい言い方でもなく、かなり古くから用いられているようです。

この点についてはやはり今泉氏も前の論文の中で言い及ばれ、現代に近いところでは天保二(一八三一)年刊行の曲山人作・仮名文章娘節用前編中巻に

ソリヤアマアさぞお力がお落(おら)なんしたらうネ

とあるのを引用し、それを手はじめに古いところに溯って、室町の蓮如上人御文章、歎異抄の例をあげ更に鎌倉の延慶本平家物語にもそのような例のあることを指摘され、最後に源氏物語に及んで、

御手つき、くろぎの御ずゞにはえ給へるは(須磨、湖月抄本)

かく世の常なる御けしき見え給ふ時は(真木柱、青表紙本)

の例をあげて居られますが、この源氏の例については尾州徳川家蔵の河内本源氏には、それ〳〵

御手つき、くろきの御ずゞにはえたるは御けしき見侍時は

とあって、「はえ裕へるは」とか「見え給ふ時」などとなっていないから、確証にはならないというような見解をとって居られます。

併し、私の調べましたところでは、源氏などよりももっと古く、たとえば、金光明最勝王経の古点にも、春日氏が、敬語は仏に対してだけではなく、法や経に対しても用いると言ってあげられた

金光明の妙法は、最勝にして諸の経の王といいます　四ノ一八
若此の金光明　経典の派布したまはむ処にして　一七一ノ二二

のような例も見えますし、また仏足石の歌でも

これの世はうつり去るとも常とはに佐乃己利伊麻世後の世のため、また世のため

といった例が見えるなど、仏に関するものには随分古くから、所有物に対する敬意表現は見られます。それればかりか仏足石の歌などには、更に、

このみあとを麻婆利麻都禮婆あとぬしの玉のよそほひ思ほゆるかも見る如もあるか

というような歌も見え宣命にも称徳天皇が仏道にお入りになる時のものに

然経乎見未都禮方佛前御法乎護未都利尊未都流方諸乃神多知仁伊末志家利（天平神護元（七六五）年十一月廿三日詔）

というのがあって、この方はいわゆる謙譲表現の様式までとっているのです。

こういうように見て来ますと、所有物や所属物に対しても敬語形式を用いるということは日本人の物の把握の仕方として伝統的なものがあり、たとえおこりすたりはあっても、誤りとして一途に退けられない性質のものがあるということになると思います。ただ、それが前にも述べましたように、雨というような特定の相手や第三者の側のものと見るには余り一般的なものである場合にはおかしく感じられるのではないかと思います。しかも、なお、そのような表現がとにもかくにも現れるということが、尊敬語を丁寧語へと移す原動力になっていることを見落してはならないと思います。そういう傾向が現代敬語の一つの大きな流れとも云えるわけですから。

(3)　ねえ、お寄りして

これまで述べて来ましたのは尊敬表現の誤用といわれるものについてでしたが、これに対して次には謙譲表現の方の誤りの問題について考えてみたいと思います。

これもやはり大分前のことですが、ある夜駅の近くの繁華街を歩いていましたら、いきなり横合から「ねえ、お寄りして」と呼びとめられたのはいささか驚きました。相手は社交喫茶か何かの女性らしく思われました。

現代女性の希求表現として「て止め」の形が用いられること、これは少し気をつければ誰でもすぐ気のつくことですから「お寄りになって」なら別に奇異にも感じなかったはずです。併し、私が変に思ったのはこの「お……する」という言い方は決して相手や第三者の動作をあらわすのには用いられないはずだからです。

私たちが、もしこの形式を使うなら、「お送りする」とか「お誘いする」とか自分の方から人に向ってしかける動作について言

うはずであり、それも割合軽い敬語として用いているのです。形の上からは自己の動作を意味する言葉の上に「お」がつきますけれど、その動作は他へ及ぶものだからつけるものであり、話手としては「お……する」全体で一つの謙譲表現と感じていることは確かです。それは「御返事」とか「御送り」とかいうのと同じ類のものと云えます。もっともこれに対しては「お……する」ではおかしい、「お……致す」或いは「お……申す」等でなければならないという考え方もあるかと思いますけれど、現代の人、少くとも三十代以下の人達は大抵「お……する」で謙譲の気持を托し得ると考えているのではないかと思います。つまり、そのように言語意識は動いて来たと見てさしつかえないと思うのです。

では、さきの「お寄りして」は、この語法をあやまって相手の動作の表現に使ったものでしょうか。私は決してそうではないと思います。これは恐らく、相手が自分の方に「寄る」ことですから、それを敬った云い方にして「お寄り」とし、その動作をするのだからというので簡単に「お寄りする」という言い方にしたものでしょう。

併し、この形は上を敬語形にし、下を裸にしたものであって、決して常態とは云えません。

すなわち、普通なら、仮にこの「寄る」という語についての敬称形を求めれば、「寄られる」「お寄りなさる」「寄りなさる」「お寄り遊ばす」「お寄りになる」等、上が敬語形になっているといないとに拘らず、下には必ず敬語形が来ます。(ただ「お寄りになる」の「になる」は敬体ではないとの疑問もおこりましょうが、この場合は相手なり第三者なりが「寄る」という状態になるという意味で婉曲な言い方をしたのが敬語になったわけですから、「になる」は「する」という意味の敬語になっているわけです。)このことは古いところでも言えるので、「寄りゃる」「寄らっしゃる」というような例から「寄り給ふ」「寄らせ給ふ」「寄らせらる」に至るまですべて同様です。(なお、「寄りゃる」は勿論「お寄りゃる」の「お」が省かれたわけですが、その「お寄りゃる」は「お寄りある」で、やはり、相手なり第三者の動作が自然にそこにあるというように婉曲に云ったものが敬語になったわけで、やはり「ある」は「する」という意味の敬語になっていると思います。この点は「お……になる」の形式や、「御幸なる」「遷御なる」等の「御……なる」形式と甚だ近いものがありますが、このことは時枝氏も「国語語原論」その他で指摘しておられます。さて、その「お寄りある」が融合して「お寄りゃる」となって更に時がたつと、もう「やる」という部分で十分敬意をあらわせるように感じ、ついに「お」を省いた形にして、しまうというところから「寄りゃる」という云い方はあらわれたのだと思いますが、その変化の経緯については、横道にそれますから省略致します。)

右のようなことは、二語以上つづいて出て来る場合にも(複合語ではなくて)云えると思います。たとえば「街に行って買物をなさる」とは言っても、「街にいらっしゃって買物をする」とは云えないように。

もっとも、以上の様な例と反対のものもあげられなくはありません、例えば「お寄る」というような語もあり、「氏はこう論じられて居る」などの云い方も見られるわけです。併し、それで

もやはり「論じて居られる」の方が穏やかに思われますし、また「およる」というような語は極めて少い例外にすぎません。

ただ、ずっと溯って、平安時代には「たぐひなく思しこがれたり」（葵）とか「まだ人さわがしからぬあしたのほどにおはしつきぬ」（総角）とか「御覧じだに送らぬおぼつかなさを」（桐壺）というような特殊な言い方が盛んに行われて居ましたし、更に古く歌経標式には「美麻旨須留」（御座する）というような云い方が見え、万葉集八六九番の歌にも「多良去姫神の命の魚つらすと美多多志世利斯石をたれ見き」（巻五）の例があって、これなどは完全に「お寄りする」と同じ表現法になります。（そういえば「御覧ず」も、恐らくは「御覧」という名詞に「す」をつけたもので相似た例になりましょう。）

併し、こういった例は大局から云っては少いのですし古くこういう例があったからといって、それを現代語の尺度にすることはできないと思います。それに、今日の「お……する」はどんな言葉にもあてはめられる一般形式であるという点に個々の語に見られる昔の例と自らことなったところもあるわけです。ところが、例の「お寄りして」に興味を持って、その後少し気をつけてもみ、調べてもみましたところ、そんな言い方が案外広まっていることがわかって来ました。

一昨年の春、朝日新聞に「ことば談義」というのが連載されて興味を引きましたが、その中で宮川曼魚氏が「奥野信太郎氏の書いたものによると、羽田の近所にある赤線区域の女は『お寄りしてちようだい』っていうそうだ。軒並みに立ってる女がみんなそういうんだって。『お寄んなさいな』とか『寄ってちょうだい』っていうのはあるけれど『お寄りしてちょうだい』っていうことばはないですね。」といって居られますが、驚いたのは私ばかりではなかったわけです。更に、その後で、今度は中村通夫氏が新宿駅での例をあげて「毎度御乗車いたしまして、ありがとうございます」と言っていたと指摘して居られます。

この場合は「致す」という言葉の使ってある点が異なりますが、これは恐らく謙譲の云い方をそのまゝ相手につかってしまったのではなく、やはり「お……する」で尊んだ云い方になると思って居り、更にそれを丁寧な云い方にしたつもりで言ったのではないかと思われます。

その他言語生活の「耳」欄で、バスの車掌の言葉として「キップをお持チシナイかたはありませんか。」（四号）「お降りいたしますか。」（三号）などの例が指摘されていますし、私自身耳にしました例でも、やはりバスの女車掌の言葉に「もう少し奥におつめして下さい。」というのがありました。この場合は「して」さえとれば普通の言い方になりますのにわざ〳〵それを入れたのは「お……する」の様式が非常に一般化していることの証拠にはならないでしょうか。

それから、もう一つ、私が通勤して居る電車の沿線のある旅館の広告に「お一人方でも（お一方ではなく）御安心してお泊り願います。」というのがありました。

このようにあげ出しますと際限がありませんが、とにかくこの云い方は予想外に多く使われているようです。ただ、ここにあげました例からも申せますが、それを使用する人は職業婦人など劃合特定な面に限られているようです。併し存外その辺から段々と

これが一般化して行くのではないかと考えられます。(註1)

(4)おつりいただきました?

ある喫茶店で何がしかのものを注文しておつりを貰った時のことです。(その店はカウンターで金を払わず、座席で注文と同時に仕払いをするしくみになって居ました。)

しばらくして頼んだ品を運んで来た女店員は私に向って「おつりいただきました?」という質問を発しました。私はとっさに頭のきりかえがきかず、ちょっと返答に窮してしまいました。何故なら「いただく」は「貰う」に対する敬語として、下目の者が上目の者から与えられることについて云う言葉であり、従って相手が自分から受取る動作については(少くとも現代に関する限り)使えないはずのものだからです。

そこで、私は「丁寧な物云いをしようとした努力が、却って彼女に自己側に用いるはずの表現と相手側に用いるべき表現とをとり違えるという過ちをおかさせたのでないか」という工合に判断しておきました。

ところが、それから暫らくして、これもS駅の近くに「いただくなら○○のコーヒー」という広告を見つけました。

一体、この広告主はどういうつもりで「いただく」という言葉を使ったのでしょうか。やはり、前の女店員と同様の誤りをおかしたのだと考えることができるでしょうか。

併し、これには少し疑問があります。何となら、この場合の「いただく」は「飲む」意味の丁寧語として用いているのかも知れないと考えられるからです。

そこで考えてみますのに、元来「いただく」という言葉は「貰う」に対する場合は勿論ですが、飲食を意味する場合でも「食う」や「飲む」と対照させて、謙譲語というように見做されて来ました。

では、どうして、このような用法がおこったのでしょうか。

それは恐らくこうだと思います。まず、実際に下目の者が上目の人から物を貰う場合には有難く頭の上にいただく動作をしたところから、その動作を行うと行わないとに拘らず、心理的な面で、「いただく」という言葉を物を受ける場合にも使うようになり、それが「貰う」と相対して用いられたところに敬語としての誕生をみたのだと考えられます。(これは与える意味の敬語「あげる」又は「さしあげる」という言葉と対照してみますと一層はっきりすると思います。)そして、次にこれが、飲食の意味に転じたのは、目上の人の恩恵を受けてはじめて口にし得るという気持から「食う」或いは「飲む」とあらわに言わず「貰う」意味の「いただく」という言葉を用いたためだと思われます。それは今日「頂戴する」という言葉が招かれた馳走の席で使われるのと軌を一にするものでしょう。

このことは「たべる」という言葉についても云えます。すなわち、この語の原形が下二段の「たぶ」であり、それが同じ活用の「たまふ」に通うことは云うまでもないと思いますが、その「たまふ」も本来「賜わる」の意味であって、転じて飲食の意味にも用いられただろうということは有坂秀世氏がすでに「下二段活用の補助動詞『たまふ』の源流について」(同再考)と題する論文の中で天平神護元(七六五)年十一月廿三日の宣命中の文句「黒

紀白紀龍御酒乎赤丹乃保仁多末倍惠良伎」その他の例をあげて云い及んで居られますが「たぶ」についてだって、勿論同様なことが云えるということは、催馬楽の「左介乎於太宇戸天引太戸恵宇天引」（天治本）の例などをみてもわかります。

このように、「食べる」も「いただく」も本来賜わる意味から発していると考えられますが、言葉として飲食の意に用いられたのは勿論「たべる」の方が古く、従って、その敬語としての価値が下落すると、これに代って「いただく」が登場したということになるのだと思います。

ところが「たべる」が敬語としての位置を堅持していた時期はかなり長く、室町は勿論それが江戸時代の初期までもつづいたらしいことは、一六〇四（慶長九）年から一六〇八（慶長十三）年にかけて刊行されたロドリゲスの日本大文典の「たぶる」についての説明に「この動詞は自分自身か他の身分の低い者かに就いて話すのに使うのであって、話す相手の人を尊敬して敬意を表するものである。『食ひ』『食ふ』というのは下品であって無礼にあたる。」（日本の言葉、二巻二号、土井忠生氏訳による。）とあるのや、一六三二（寛永二）年刊行のコイヤードの日本語文典（大塚高信訳）に「尊敬すべき人の前ではmèxi uo cùi maraxita（メシヲクヒマラシタ）とは言はないで、mèxi uo tabe maraxita（メシヲタベマラシタ）と言ふ。」と説いてあるのをみてもわかります。しかも、その一方「いただく」の説明は見あたらないのです。

これは実際の例についてみても云えるようで、狂言記などにも「いただく」の用例は「賜わる」の意味のものですら余り見当らないようですが「たべる」の方はいくらでも見いだせます。

併し、江戸時代も時がすすむに従い、「いただく」は段々頭を擡げて来て、ついに飲食の意味でも用いられるようになります。ただ、それでも「賜わる」の意味の方が多いことは確かですし、飲食の意味の例が新しいことも事実です。（「浮世風呂」にも「日に三度米飯を三膳づゝ頂いてゐるは天上の栄花だ」（四編巻之上））というような例もありますが、やはり賜わるの意のものが断然多く見えます。）

また湯沢幸吉郎氏が「江戸言葉の研究」の中であげられた例だけを見ても「もらう」意味のものは「（賃銭ハ）弐百づゝいただきとふござります」という例が明和六（一七六九）年の洒落本「郭中奇譚」からすでに拾われていますが、飲食の意としてあげられた次の例はいずれも新しいものばかりです。〔花筐（人情本。松亭金水作。天保十二（一八四一）年刊）〕

○ドレ一ぷく頂いて〔喫煙〕往かう〕

○召使「ハイ、只今御膳を食つて居りやす……

「御膳を頂てとか、お食を食つてとかいふものだ〔素人狂言紋切形（滑稽本。式亭三馬作文化十一（一八一四）年刊）〕

とにかく、以上のような経路を「たべる」及び「いただく」の二語は辿って来たのですが、その方向は現代に至って一層はっきりして来たのではないかと思われます。

つまり、「たべる」はもう丁寧な意味はほとんど失って、そのまゝ単にeatの意味を示すだけになり、「いただく」もまた本来の「賜わって飲食する」というような気持、いってみれば「飲ませていただく」「食べさせていただく」というような気持は失って、ただ場面に制約されて丁寧な言い方にしなければならない場合に用いられるようになっている。つまり一つ前の「たべる」に

とってかわろうとしているのではないかと思われます。そして、このことは「食う」という言葉が野卑な感を与える言葉に下落していること、同時に「賜わって」という気持を特に示す必要のある場合には「頂戴する」というような言葉の一方に行われていること、この両事実と比較対照してみればはっきりしてくると思います。母親が子供に向って「早くいただくんですよ」といったりする例から更に進んで、若い女性の会話の中に「あなたもいただかない?」というような言い方の現れていることは右のことがらを実証する一つの例にはならないでしょうか。

とすると、例の広告、「いただくなら○○のコーヒー」の中の「いただく」もそれらに準じて見ることができるかも知れません。つまり単に「飲む」というのを丁寧な言い方にしただけと見るわけです。併し、それにしても「めしあがる」という言葉が一方にあるわけですが、他方には次に述べますようにいわゆる尊敬語を用いないで、丁寧語ですまして行こうとする傾向もあるようです。(註2)

(5) 先生居りますか

この頃教員室で「○○先生居りますか。」といった学生があって、驚きました。

「いらっしゃる」や「おいでになる」という言葉を使う学生も勿論ありまけれど、近頃では「○○先生居ますか。」といって平気で入って来る学生の方が多いくらいですから、驚く方が変なのかも知れませんけれど、私にはやはり奇異に感じられたことです。一体、「居る」と「居る」との違いは微妙で殆ど差別なく使われている場合もあるようですが、自分の動作について「……して居ます」という場合と「……して居ります」というのとを比較してみますと、やはり「居る」の方に幾分自分を下において言って居る感じがあるようです。

浮世風呂三編巻之上に「六十ぢかきばあさま」と「詞づかひもあそばせづくしな」「人がらよきかみさま」とが話をするところがあり、その会話のやりとりは、ともに大変丁寧な言葉遣でありながら、その間にはっきり上下関係があらわれて居る部分がありますが、談たまたま女中のことに及んで後者が「風だと申て臥って居ます」という云い方をしますと、前者は「お飯をたべては寝て居にくいか致して」と割合あっさりして居ます。

この程度の差異は今日でも認められるのではないでしょうか。とすれば、「居る」は一般的としても、「居る」という言葉はやはり自分の方には使えても相手にはつかえないはずのものです。だから「先生居ますか」より「先生居りますか」の方が一層変に感じられるのだと思います。従って、この言葉を使った学生は「居ますか」というような言い方をする人よりは丁寧に云ったつもりで却って逆効果をあげたことになると思います。

ところが、こんな例は何もこの学生に限ったことではないらしく、その後運動会の呼出しでも、「○○君居りましたら」とやっていましたし、そう云えば、言語生活(三号)の耳欄でも「おたずねいたします、どこそこのだれさん、オリマシタラ駅長事務室までおいでください」という例をあげて居ました。併し、私たちが変だ変だと思っている中に一般にはこういう云い方はどんどん広がって行くようです。

もっとも、「先生居られますか。」となりますと、何か文語臭いという感じはしながらも「居りますか。」などと違ってそれほど変に感じられないのは、「れる」という言葉のマジックによるものなのかも知れません。

とにかく、こうして、「居る」という言葉は目下の方の者にだけ使うのではなく、軽い丁寧語として、益々一般化の道を辿るものと思われます。

ところで、これと似た例に「申す」があります。

この言葉は本来下目の者から上目のものに向って云う動作について用いられたものであり、大名などが「早く申せ」というような場合には使えても一般には他から自分に言う動作には用いられないものでした。

ところが、今日では「御用が御座いましたらさようお申しつけ下さい。」などという云い方はむしろ当り前になっていて、別に不審も抱かれないようですし、映画や、音楽や、芝居などの入場券の裏面をみますと、よく「御気分の悪い方は受付までお申しいで下さい。」などという文句を見いだします。

そして、決して、「仰せつけ下さい」とか「仰せいで下さい」などとはなって居りません。「仰文」に対する「申文」「仰出」に対する「申出」のような対立は、今日ではすでになくなって居ります。

では、この現象をどう解釈したらよいでしょうか。

私はこう思います。これは「申す」がもう上下関係の意識に基いて用いられるのでなく、単なる場面の制約によって、改まった云い方にしなければならない時に「言う」という言葉の代りに用いられるようになっているのだと。そして今迄「申す」を用いていたところには「申しあげる」が用いられるのだと。

こう解してこそ、先の「お申しつけ」や、「お申しいで」も解釈がつくので、そうでなければ「お」のつく理由が説明できないのではないでしょうか。

このように考えて来ますと、「先生がそう申して居られました。」とか「申されて居ります。」などというのも解けて来ます。「申す」がいけないとかいいとかいうのでなく、すでにそういう風にも用いられる性質のものになっているということを申したいのです。しかも、このような目上の言語行動について使う例はすでに伊曾保物語などにさえ見えていて「シャント、処のひとびとにその分申さるれば」（新村出校註（天草）本伊曾保物語）というようにあるのですから、その歴史は存外古いことになります。

なお、「申して居られる」と「申されて居る」では、前にも申しましたように後の方に尊敬体の言葉を据える方が一般的であるところから、前者の方が、伝統的だとは思いますが、後者の方には何か新しい感覚があるようにも思えます。後者の例を広津和郎氏の小説「泉への道」から一つあげておきます。

先生はその事を眼を輝かして小生に御報告になり、『ひよつとすると京子かも知れない』と申されて居ります。

これは高倉という青年から恩師の娘に向って書いた手紙の一節です。

その他、誤りだとか誤りでないとかいって問題にされる言い方に目をとゞめますなら、あげてよい例はいくつも見いだされるこ

とでしょう。

敬語の特殊な言いまわし、たとえば「お目にかかる」「お目にかける」「お耳に入れる」などはようやく忘れられて行く傾向にある一方、前にも述べました「お逢いする」「お見せする」「お聞かせする」などの言い方の進出している現在、「父にお目にかかっていただけませんか。」というような言い方の誤りは完全に見すごされてしまいそうです。事実私が教場でこの言い方の変なことがわかる人はと云って尋ねました時にも殆ど解答はありませんでした。

それは恐らく、「お目にかかる」といい方そのものが段々に少くなっていっているからだと思います。とすると、却ってすっきりと「お逢い下さいませんか」が出てくるかも知れません。それならそれにこしたことはありません。併し、ひょっとすると「お逢いして下さいませんか」があらわれそうです。そして、それがむしろ現実の敬語の実態なのかも知れません。

以上、私は敬語の誤りといわれるものについて、その是か非かを問うのではなく、どうしてそのような現象がおこったのか、またそれは現実にどういう方向に向って行くのだろうかということについて少しばかり考えを述べたつもりです。

註1その後「言語生活」耳欄で指摘されたものにNHKの歌のおけいこにおける「ゴチユウイシテ、もう一度歌いましょう」(十六号)QRの「メモでも御用意されながら」(十六号)があります。後者は二重敬語になっている点一層注意を引きます。

註2岩淵悦太郎氏より「いただくなら月ヶ瀬のお汁粉」の例のある旨御注意がありましたので附記致します。

〔追記〕

この論文は昨年十一月二十日の国語学会公開講演会での講演草稿に二三手を入れたもので、註もその中に入ります。演題は「敬語の誤りと行過ぎについて」でしたが、時間の関係と余り規範的になることの怖れとから「誤り」の部分だけとりあげましたが、「行過ぎ」については別に考察してみたいと思って居ります。(一九五五年五月四日)

——早稲田大学講師——